

『数えよ 主の恵み』 (要旨)
 聖書箇所：ヨナ書 1 章 4 節～ 1 2 節



【1】忘れられないこと／忘れてしまうこと

一週間を振り返る時に、私たちの心に浮かび上がってくることはなんでしょうか。私たちは挫折や後悔をなかなか忘れることができません。

「あの時、どうして自分は…」と、昨日のことのように鮮明に思い出すこともあるでしょう。そうした私たちに対して、聖書は語ります。「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」(詩篇 103:2) と。これは「主」である神を信じていることが前提にある勧めです。つまり幸運が偶然重なった、と喜ぶのではなく、一つ一つの出来事において、主が良くしてくださったことを忘れることのないよう勧めているのです。

しかしヨナはその「主」を忘れたかったのです。主が命じられたことと真逆の道に向かいました。すなわち主のことばを退け自分の思いのまま歩もうとしたのです。そうして彼が向かった先に、タルシシュ行きの船がありました。

さて、その船の船員は、主を忘れようとするヨナにとってありがたい存在でした。彼らにとっては、ヨナが「主の御顔を避けて」いるか否かは問題ではありません。船賃を払うヨナを拒む理由はありませんでした。安心したヨナは船の底に降りて行きぐっすり寝入りました。疲れが溜まっていたのでしょう。かなり揺れていた船の中でも目覚めることはありませんでした。

さて、ヨナは「主」を知る者でした。しかしその主から離れようと別の方向に向かいました。とは言え、後悔の念に押しつぶされるわけでもなく、自分の身の安全を船の船長と水夫たちに委ねて、ぐっすり眠りについたのでした。

【2】主が大風を吹きつけた

ところが彼の安眠を妨げる出来事が起こりました。「主が大風を海に吹きつけられた」(1:4) のです。聖書は、偶然に嵐が起こったのではないと強調します。この嵐は「主」によって引き起こされたのです。しかし主を知らない船長そして水夫たちは目の前の嵐に恐れしました。船員は、自分たちができる最大限の努力をしました。

まず、それぞれ自分の神に向かって叫びました。次に船を少しでも軽くするため、積荷を海に投げ捨てました(*主が大風を海に吹きつけられたと同じ動詞)。しかしそうした彼らの努力も虚しく、船は難破しかけたのです。彼らは絶体絶命という場面で、船底で眠るヨナを叩き起こします。「いったいどうしたのか。眠りこけているとは。起きて、あなたの神に願いなさい。もしかすると、その神が私たちに心を留め、私たちは滅びないですむかもしれない。」(6)

ヨナは「主の御顔を避けて」タルシシュに逃れました。眠っている間に、人々と一緒にタルシシュに向かっているものと思ったことでしょう。ところが、ヨナはその船底で「あなたの神」と向き合え、という強い訴えを船員から受けたのでした。

【3】数えよ 主の恵み

ヨナはタルシシュ行きの人々に混ざり、その一員に溶け込んだかのようにでした(参照: 1 章 10 節)。しかし命の危険を前にした人々は、ヨナを自分たちの仲間ではなかったと見做します。そして、この嵐の責任をヨナに取らせる必要があると結論しました。ヨナは自分が何者であるのかを期待しない形で明らかにせざるを得ませんでした。ヨナは答えます。「私はヘブル人です。私は、海と陸を造られた天の神、主を恐れる者です。」(1:8)

船底で眠るヨナは、嵐の中で自分が何者であるのかを、再び向き合うことになったのです。嵐を前にした人々は、様々な努力によって難を逃れようとしてしました。しかしそうした人々の努力が功を奏して危機を逃れたわけではありませんでした。主の主権の中で嵐が起こり屈になったからです。これには、水夫たちも海と陸を造られた天の神を認めざるを得なかったのです。

ヨナは神様を忘れようとしてしました。しかし神様はヨナを見放すことはありませんでした。神様は大きな魚を備え、ヨナの命を守られました。ヨナにとって順風満帆とは言えない局面においても「主の恵み」が注がれていたのです。